大阪樟蔭女子大学図書館報

ことのは

第4号 2010.3

CONTENTS

●ジェンダーと読書
（児童学部児童学科教授）石川義之… 2

●海外図書館事情
バルセロナ自治大学人文科学図書館
（学芸学部国文学科非常勤講師スペイン語担当）
アルベルト・ミヤン＝マルティン… 3

●特集絵本
奈良絵本、という名の絵本
（教養教育センター教授）歌野博… 4
うさぎとかいじゅう、そして詩の絵本
（学芸学部英米文学科教授）武田雅子… 5
子どもと絵本を読むとき
（児童学部児童学科講師）神村朋佳… 6
絵本の魅力
（人間科学部児童学科4回生）大嶋利沙… 7
わたしのすすめる絵本 …… 8

●卒業生からのMessage
（学芸学部英米文学科1982年卒業）末政栄… 9

●学生からの声
図書館と私
（学芸学部英米文学科4回生）山本真理子…10
The Big issue
（学芸学部ライフプランニング学科3回生）石野美由紀…10
本との出会い
（人間科学部心理学科3回生）川村美智留…11
読書をとおして
（短期大学部キャリアデザイン学科1回生）馬場梓…11
●学生選書ツアー報告 ……12
●自著を語る 『幸せを築く対人援助』
（児童学部児童学科教授）岩﨑正子…13
●オトナになれない大人の口癖
ー村上龍『69（sixty-nine）』ー
（学芸学部国文学科教授）有田節子…14
●図書館職員だった頃
（学芸学部ライフプランニング学科教授）森田園子…15
●情報化時代の読書とは
（児童学部児童学科准教授）佐野美奈…16
●「図書館利用実態調査」アンケートから ……17
●ベストリーダー2009 ……18
●2009年度図書館統計 ……19

ジェンダーと読書

図書館長
石川（いしかわ）　義之（よしゆき）
（児童学部児童学科教授）

現在の日本社会では、「男は外で働き、女は家を守る」という性別役割分業体制が常識になっている。この体制には一部の女性からの強い反対もあるが、依然として根強い支持率を得ている。

女性の労働

この体制のもとでは、女性たちは、家事・育児さらには介護労働という、男性と同様もしくはそれ以上の長時間労働を強いられている。しかし、この女性たちの労働は、男の賃金労働とは異なる「不払い労働（unpaid work）」なのだ。男性の労働は、生産労働であり、それゆえ「社会的な意味」のある「公的」な労働であり、さらに賃金が支払われる労働であるのに対して、女性の労働（家事・育児・介護）は、モノを生産しない、それゆえ「私的」な労働であり、さらに、賃金を支払われることのない「不払い労働」なのだ。簡単に図式化すれば、男＝「公的」労働＝賃金労働／女＝「私的」労働＝不払い労働、という構図が成り立っている。もちろん、女性の「私的」労働よりも男性の「公的」労働のほうが、より社会的に価値のある労働として認識されやすい。そもそも男の生産労働は、女の労働と異なり、賃金が支払われる労働なのだ。ここに、男性の女性に対する優位の構造が成立するゆえんがある（冨士谷・伊藤『ジェンダー学を学ぶ人のために』世界思想社、2000）。

このような男性優位の家父長制社会構造のもとでは、働いている女性も賃金、昇進、管理職への登用などにおいて差別を受ける。また、M字型就労にみられるように結婚・出産で退職を余儀なくされて、復職に際しては不安定就労をやむなくされる場合も多い。そもそも就労自体において、男性が多く、設計、プログラム、企画開発などの知的で創造的な職種に就くのに対して、女性の場合は、マニュアルどおりに行う単純定型労働への就労を強いられる。女性は、性別役割分業体制に従って家庭に閉じ込められるか、就労してもこのように数々の性的な労働差別に悩まされるのだ。

変革の主体としての女性

1985年に男女雇用機会均等法、1999年には男女共同参画社会基本法が制定され、このような差別構造を是正する動きが本格的に始まった。しかし、日本社会に根深い女性差別構造の変革のスピードは鈍い。バックラッシュの動きもある。ここで肝心なことは、フェミニズム運動にも示されるように、家父長制社会の変革の主体は女性自身であることだ。心ある男性も差別解消に力を貸してくれるであろうが、基本的に、女性が受ける差別は女性自身が跳ね返すしかない。他者に頼って自分の受ける差別を解消することは、百年河清を俟つようなものだ。女性が自ら変革の主体としての力を身につけることが肝要なのだ。そのためには女性自身のエンパワーメントが必要となる。

エンパワーメントとしての読書

エンパワーメントの方法にはいろいろあるが、なによりも重要なことは自己学習である。自己学習の要（かなめ）はいうまでもなく読書である。本学は別として、性別役割分業体制に浸食されたエスタブリッシュとしての教育機関は必ずしもジェンダー・フリーの方法を教えてはくれない。ならば自分で勉強することだ。幸いジェンダーに関する書物は山のように出版されている。ジェンダーを学ぶことは、男性中心の家父長制社会に主体的な女性として打って出る場合の武器を得ることにもなる。併せて、ジェンダー・フリー社会を実現する担い手として自己をエンパワーメントすることにも繋がる。さらに根本的には、ジェンダーを学ぶことは、女性が自分の生を全うする上でも重要な意味を持つのだ。

紙幅も尽きたので、最後にジェンダー関係の基本的図書を若干挙げておく。自己学習に役立てて欲しい。

江原由美子・山田昌弘著『ジェンダーの社会学　入門』岩波書店。

伊藤公雄・牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社。

伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子著『女性学・男性学－ジェンダー論入門－』有斐閣。

落合恵美子著『近代家族とフェミニズム』勁草書房。

池内靖子・二宮周平・姫岡とし子編『21世紀のジェンダー論』晃洋書房。

海外図書館事情

バルセロナ自治大学人文科学図書館

国文学科非常勤講師
スペイン語担当
アルベルト・ミヤン＝マルティン
Alberto Millán Martín

私が大学時代を過ごしたスペイン国立バルセロナ自治大学は、学問の自由を支える「大学の自治」という旗を掲げる教育機関として1968年に設置され、政府の管理から離れた教員の採用システムやカリキュラムの編成の自由などの他に、とりわけ財政自主権を最初から主張した。そして、1975年まで軍事独裁政権下にあったスペインの中でも、都心部から離れた谷間にある自治大学のキャンパスは、デモなど自由を求める民主化運動や学生の集会が行われる主な場所の一つとなった。現今でも、教育・研究・文化促進の場でありながら、社会運動が渦巻く所としても有名である。近年、欧州統合に向けて徹底的な大学改革を行っており、男女共同参画社会および多言語社会の形成の推進を進めている大学としても知られるようになってきた。

大学概要

バルセロナ自治大学はスペインの一流大学の一つで、約45,000人もの学生・院生が在籍している。それに、約3,400人の教員、約2,300人の職員が自治大学を職場にしている。外国人留学生は、およそ2,700人もいるという。アパート形式の寮と教職員用の住宅の人口を合わせると、大学構内に2,000余りの人が在住していることとなり、キャンパスは昼間人口３万人前後の小さな町とほぼ変わらない。普通に生活できるような公共施設やサービス業の店も、多種多様である。

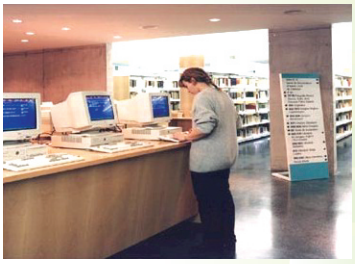
人文科学図書館

大学の図書館は10以上の分館を含めるが、ここでは哲学・文学部、教育学部、心理学部、翻訳通訳学部の４学部付属の人文科学図書館の事情を述べたい。100万余りの蔵書を所蔵している人文科学図書館は、8,600㎡の面積に、1,100余りの閲覧席、41の視聴覚閲覧席、グループワークのできる会議室、ノートパソコンに接続できるステーションなどがあり、カタログ検索以外にも自由に使用できるコンピューターが約90台設置されている。有料コピー機が設置されている部屋も各階にあり、数年前にWi-Fi（無線LAN）ネットワークが構築された。貸出の条件は、日本の大学図書館とはあまり変わらないが、延滞ペナルティ（貸出停止）は比較的に厳しい。やはり大人数が使用する図書館だからだろう。なお、最上階の

４階にある、日本などアジア諸国関連の図書室や語学自習ルームは、スペインの中でも自治大学が誇る設備である。ここに学生たちが許可を得ず勝手に使える掲示板もあり、国際交流もできる社交の場として人気のあるスペースとなっている。

社会科学図書館

ちなみに、経済学科・法学科などを含む社会科学部付属の図書館は、大学の中央図書館として機能を果たしており、昔から１年間365日無休24時間開館図書館である。日本を含む他国と違ってコンビニエンスストアや飲食店などにおける24時間営業の文化が浸透していないスペインでありながらも、大学図書館となると24時間開館サービスが設けられているという意外な状況は、非常に興味深いと思う。



20世紀のスペイン・カタルーニャ語文化圏の代表的な学者・思想家ジョアン・フステルは、「図書は人生の代用にならないが、人生も図書の代用にならない」という言葉を遺した。学者や学生などには人生経験も必要だとは信じている人が多いけれども、一般の人々にも読書からしか学べないものが必要だと考えている人はどれぐらいいるのだろうか。思索や研究の場である大学図書館は、人生を変えてくれるような場所でもあると考えたい。

写真提供（内部）：バルセロナ自治大学ＨＰ
写真撮影（外部）：クリスティナ・フィシェル
（翻訳通訳学部現役生）

特集 絵本 えほん

奈良絵本、という名の絵本

教養教育センター教授　歌野（うたの・ひろし）　博

「ならえほん」

奈良絵本は、室町末期から江戸時代にかけて盛んに製作された、金泥・銀泥(金粉や銀粉を膠で溶いた顔料)や緑青、群青、胡粉などで鮮やかに着彩された絵本です。形態的には、絵巻物が冊子化されたもので、内容は、『一寸法師』『物くさ太郎』『文正草子』など、御伽草子と呼ばれる短編物語が中心です。つまり、奈良絵と称される挿絵入りの本、それが奈良絵本です。従って、「ならえぼん」と濁るところですが、『日本古典文学大辞典』はじめ『広辞苑』『大辞泉』などもっぱら「ならえほん」で通しています。手元の辞典類で、濁るのは『日本国語大辞典』と『マイペディア』だけです。このことは、奈良絵本の出生の事情を示唆します。

源流としての奈良

奈良絵といい、奈良絵本と呼ばれるからには、国のまほろば、たたなづく青垣山ごもれるうるわしき、この奈良の地で生まれた絵本と素直に受け取りたいところですが、そうは簡単にいかないようです。奈良絵本という語が当時からのものでなく、明治に入った頃の命名であること、製作地も奈良に限定されず、扇屋で有名な城殿に抱えられた絵師たちや、その一部が独立した草紙屋、絵屋など、むしろ京都を中心に制作されたものとする説が有力です。絵屋は、屏風、掛軸、扇絵、灯篭絵、貝絵、染織、下絵など需要に応じて絵画を広く製作販売した業者で、琳派の祖である俵屋宗達も俵屋という屋号の絵屋の出身だといわれています。

奈良絵本は、注文を受けて絵師が絵筆を取った絵画作品というより、需要に備えてあらかじめ量産された商品(仕込絵)とされます。三都の随一である京都に需要が集まり、そこで多くが製作されるのは当然です。しかし、始まりは別の話です。

大規模社寺には、絵所と呼ばれる、絵画制作を業務とする部署が設けられていました。中でも奈良の興福寺の絵所は、　設置も早く、規模も三座(特権的同業集団)を擁し、他の社寺をはるかにしのぐもので、南都絵所として知られます。こうした絵所に所属した絵師たちが後に独立して絵屋や草紙屋となり、奈良絵本を手がけたとされます。少なくとも、奈良絵本の源流はまさしく奈良に発し、奈良絵本なる名称は、当時からのものではなくとも、由緒正しいというべきでしょう。

絵を鑑賞する

さて、絵本の生命たる絵については、構図といい、色使い、輪郭や線の感じといい、素朴でゆかしい印象は大方の認めるところです。当時のセレブの間では嫁入り道具の一つ、いわゆる嫁入本として、また、違い棚を飾る棚飾本として人気があったのも頷けます。

素朴な美しさ、稚拙、愛すべき稚気、下手。奈良絵本の絵を評する常套句です。作品としての絵の鑑賞眼で、商品としての絵を評価した点で、これらの常套句は無意味です。のみならず、鑑賞する者の全き自由にゆだねられるべき鑑賞に、成心を植えつけるとすれば、有害でしかありません。今こうして綴っている駄文の如き、絵を前にしない一切の言説もまた無意味である以上に、野暮というべきでしょう。奈良絵本の現物をとくとご覧あれ、と願うばかりです。

終わりに蛇足ひとつふたつ。奈良絵本には製作者の個人名等が記されていないせいで、ほとんど不明のままだったところ、筆跡の鑑定による最新の研究が、仮名草子(御伽草子の後を受け、仮名または漢字仮名交じり文の平易な読み物として西鶴の浮世草子に受け継がれる江戸初期文芸)の代表的作家である浅井了意や、200万部を超えるベストセラー『女性の品格』の江戸時代版ともいうべき『女今川』『女実語教・女童子教』（この 3 書はいずれも本学図書館にあり）を書いた女性が、奈良絵本の製作にもかかわっていたらしいことを明らかにしています。奈良絵本をぜひ見てみたい、という気になっていただけるのでは、とあえて書き添えます。

特集 絵本 えほん

うさぎとかいじゅう、そして詩の絵本

学芸学部英米文学科教授　武田（たけだ・まさこ）雅子

結婚するカップルへ、よく贈ることにしている絵本、『しろいうさぎとくろいうさぎ』に初めて出合ったのは、大学生のときでした。たちまち心がふんわかふんわかしてしまったのですが、それは絵のそういうペンのタッチそのものがもたらしてくれる幸せ感でした。愛の目覚めと確認をこれほどやさしく見事に表現した作品は他にないのではないでしょうか。というふうに、絵本のすばらしさとして、ぱらぱらっとページを繰ればすぐ自分の好みかそうでないかがわかるということがあります。

絵本の感動

いえ、ところがそうとも言えません。『かいじゅうたちのいるところ』は、名作の呼び声高いものですから、早くから存在を知っていました。でも、少しページを繰ったところでは、ごろごろ変な動物が出てきて、全く好きになれませんでした。でも、あるとき、丁寧に本文を原文で読むという機会がありました。最後のページにたどり着いたとき、思わず涙が浮かんでしまい、これは傑作だと感動したのでした。傑作というものは形式を選びます——なぜあの動物たちが出てくるか、なぜやんちゃして叱られた主人公マックスは、最後に照れた表情を浮かべるか、絵本ならこそ、生き生きとしみじみと伝わってきます。

原文で読む楽しみ

もう一つ、原文ならではのこともあります。この「かいじゅう」というのは、何とかザウルスというものではなく、“wild thing”、すなわち「野生のもの」「やんちゃなもの」ということで、これがまた、やんちゃなマックスを叱るお母さんの言葉でもあるのです。日本語の訳では、お母さんが「かいじゅう！」と叱ることになり、後で怪獣が出てくることと符合させるために仕方ないのですが、どうもこの流れは原文の英語ほど自然ではありません。原文でこそにんまりできる重要ポイントです。先ほどのうさぎの本は、原題が Rabbits' Wedding で、これは訳のほうがかわいい——と比べてみる楽しみもあります。

さて、最近、世界の絵本展で入選する日本の絵本も数多くなり、優れた日本の絵本作家も輩出するようになりましたが、まだまだの部門があります。日本語訳でいい絵本を見つけたら、たいていの場合、原本を探しますが、それは些細なこととして日本では見逃されているであろう活字とレイアウトのため、がらっと全体の印象が違うからなのです。

詩の絵本

こうして、海外に出ると、新たな絵本や、原本を、そしてもう一つ、私の専門である詩の絵本も絵本コーナーで探します。英米では、自国の詩人を子供たちに読ませるということにとても熱心で、最初から子供向けの詩もあるし、また有名な詩人の作品の中でも、子供向きのもの、やさしいものに絵がつけられて絵本として出ています。

こんな詩も取り上げられているのかと参考になることも、つけられた絵が解釈のヒントになることもあります。英米詩の絵本のため、かなり散財してしまい、狭い我が家では収納が悩みの種で、いずれはどこかにまとまって置いてもらえる所はないかしらと年を重ねるごとに思うことしきりです。今回この原稿を書かせていただいたのを機会に、この場を借りて、お知恵を拝借できればと願っております。ちょっと虫が良すぎるでしょうか。でも、どうぞよろしく。

特集 絵本 えほん

子どもと絵本を読むとき

児童学部児童学科講師　神村朋佳（かみむら・ともか）

車座になって、何かを待ち受けている、そんな子どもたちの中へ入っていくとき、心の中を不安が駆け抜けていく。今日はどんな子どもたちだろう。子どもたちの様子は？　この本、このプログラムでよかっただろうか……。

あるひ、サリーは……

絵本を取り出すと、子どもたちの視線がいっせいに絵本に注がれる。

あるひ、サリーは　おかあさんと　こけももやまへ、こけももを　つみにいきました。
サリーは、ちいさな　ぶりきの　ばけつをもち、おかあさんは、おおきな　ばけつを　もっていきました。

ページを繰る音、ざわめき、しわぶき、こそこそしゃべる声……。つつきあったり、顔を見合わせたりする子どもたち。そんな子どもたちの反応のに、手ごたえを探り、一つひとつ確かめながら、読み進めていく。

サリーは、こけももを三つぶつんで、じぶんのちいさいばけつにいれました……ポリン・ポロン・ポルン！

ブリキに弾むこけももの音に、子どもたちの耳がいっせいにそばだつ。

それから、もう三つぶつむと、それはたべてしまいました。

そこかしこからもれる笑い声。幼いサリーへの共感が芽生え、子どもたちがぐっと絵本に引き込まれてゆく。

それから、またいくつかつむと、ひとつをばけつにいれました――ポルン！　そして、あとのはたべてしまいました。そのあと、ばけつにはいっていた四つも、みなたべました。

ポリン、ポロン・ポルン！と、繰り返される音が、耳をくすぐる。緩急自在の語りに、そして、つんでは食べてしまうサリーの行為の繰り返しの丁寧な描写に、集中力が高まっていく。空気がぴんとはりつめる。子どもたち、一人ひとりが、物語の糸を支える網の目となり、紡ぎだされ、はり巡らされた糸が、そこに一回きりの美しい蜘蛛の巣を描きだす瞬間である。

読み聞かせが開く絵本ならではの世界

絵本の読み聞かせをしていれば、子どもとともに、一冊の絵本に、一瞬とも永遠とも知れぬ時を生きることは決して珍しいことではない。数多の先達が、子どもとの忘れえぬ出会い、子どもと絵本との稀有な通い合い、子どもが絵本に与えてくれた深みや広がり、輝きについて、報告し、語ってきた。そこには、絵本ならではの世界が、たしかに、開けていると感じられる。

絵本をともに読むとき、わたしと、一人ひとりの子どもとの間にわたされる糸は、ふるえ、ひきあい、時にぴんとはりつめたり、ふっとゆるんだりしながら、微妙なバランスでそこに何かを描きだす。子どもと、絵本と、わたし。息をのみ、息をつめ、そして、ほーっと息をはく……。

最後に、ふっと体がゆるんで、笑みが浮かぶとき、はり巡らされた糸は一瞬にして消え去ってしまうとしても、そこに描かれた何かは、共に、一つの世界を構築し、支えあい、くぐりぬけた、かけがえのない体験とともに、一人ひとりの記憶の奥深くにしまいこまれるのである。

読み聞かせの場面は、小学校１年生クラスでの「朝の読書」体験より。引用は、ロバート・マックロスキー『サリーのこけももつみ』岩波書店1986（Blueberries For Sal. Robert McRCloskey. 1948）より。

絵本の魅力

人間科学部児童学科４回生　大嶋（おおしま）　利沙（りさ）

特集 絵本 えほん

私は、絵本の魅力というのは、子どもから大人まで幅広い人達が楽しめるというところだと思います。

絵本の可能性

私は、大学ではボランティア部に所属しており、ボランティア活動の中で大学の近くの子ども図書館でお話し会を何度もさせていただいていました。お話し会には、幼児から小学生、その保護者など幅広い年齢の人がやってきます。お話し会の内容としては、『はらぺこあおむし』や『クレヨンのくろくん』のパネルシアターや『にじいろのさかな』の劇、『浦島太郎』のペープサート、大型絵本や紙芝居の読み聞かせなどをしました。絵本には、基本的に読み聞かせの対象年齢や一人で読む対象年齢があり、お話し会には、その対象年齢以外の子どもがたくさん来られます。そのためどのようにすれば、対象年齢以外の子どもが理解でき楽しんでもらうことが出来るかということを考え、絵本のお話をパネルシアターや劇にしていました。このように、絵本の読み聞かせでは、絵をずっと見て話を聞くだけですが、パネルシアターや劇にすることで、登場人物が動いたりするため、絵本の対象年齢より低い子どもや高い子どもでも、集中力が続いたり、飽きずに絵本のお話の世界の中にずっと入っていることができるのだと思います。そして、絵本をパネルシアターや劇にすることで、１つの話の中でも様々な表現の方法があり、色々な楽しみ方があり、このような表現をすることで、一つのお話でもずっと楽しむことができるのだと思いました。

疑似体験としての絵本

また、絵本のお話も私たち大人が子どもたちに伝えようとして話すよりも、絵本の内容に話したいことを組み込むことで、子どもたちに分かりやすく伝わります。どんな絵本にも子どもたちに読んで感じてほしいこと（意図）があります。例えば、交通安全や人間関係などの内容です。このような内容を絵本の中の登場人物が、子どもたちの代わりに体験することで、私達大人がただ話して聞かせることよりも、子どもたちに絵で登場人物がどんなことになったかなどを見て、子どもたちが疑似体験をすることで理解がしやすくなるのだと思います。また、子どもたちが疑似体験するだけでなく、話の内容から子どもたちが考えたりして、より深く子どもたちの心に残るようにできるのではないかと思います。

大人が読む絵本

そして、近年、大人の人も絵本を読むようになりました。子どもの絵本を大人が読むのが基本ですが、最近では、大人向けの絵本も発売されるほどです。大人が絵本を読むことで、幼いころのことを思い出したり、幼いころに読んだものを読み返すことで、その当時には、感じることができなかったことを感じたり、理解できなかった話が理解できるようになります。このようなことを感じることは、社会でのストレスなどを忘れ、暖かい気持ちにさせてくれるのではないかと思います。絵本の内容もほとんどがハッピーエンドで終わるため、読み終わったときの気持ちもすっきりするといった癒しのような効果を求めて、大人は絵本を読んでいるのではないかと思います。

このように絵本には、大人から子どもまで幅広い人たちを楽しませてくれます。特に、子どもたちに感じてほしいことがたくさん描かれています。このことを親や保育者などが、理解しやすいように読み聞かせをすることで、絵本の魅力が生きてくるのだと思います。

特集 絵本 えほん

わたしのすすめる絵本

お気に入りの絵本を紹介していただきました。

さぁ、図書館へ Go!

今度はあなたが手にとってご覧ください。

白井 佑佳（学芸学部国文学科 3 回生）

14ひきのぴくにっく

いわむらかずお さく
童心社　1986

心地よい春の陽気の中、ピクニックに出掛けた14匹のねずみ達。人の視点では気が付かない不思議で温かな森と出会える作品です。ぜひ、おにぎりにも注目を！

湯川真由子（学芸学部国文学科 4 回生）

てぶくろ:ウクライナ民話

エウゲーニー・M・ラチョフ え
うちだりさこ やく
（世界傑作絵本シリーズソビエトの絵本）
福音館書店　1965

森でおじいさんが落とした手袋が、なんと動物の家に変身！！住人が次から次へと増えていく手袋には、意外（？）な結末が待っていた。

本田千花菜（学芸学部国文学科 2 回生）

3びきのかわいいオオカミ

ユージーン・トリビザス 文
ヘレン・オクセンバリー 絵
こだまともこ 訳　冨山房　1994

オオカミ達と極悪な大ブタの発言や行動に度胆を抜かれるが読後、考えさせられる作品。「３びきのこぶた」と読み比べても良いかもしれません。

今田 祐香（学芸学部英米文学科 3 回生）

Puss & Boots

Ayano Imai 著・イラスト

この絵本は、イタリアボローニャ国際絵本原画展に出展されていました。可愛らしい猫の表情とイラストに心が奪われます！是非、読んで見て下さい。

これはドイツ語版です

卒業生からのMessage

粋！シェフのお茶漬け　大阪弁の翻訳

末政栄さん
すえまさ・さかえ
学芸学部英米文学科30期
PLUTO英会話教室室長

京都は八坂さんの袂に、カウンターとテーブル席が三つ四つの粋なフレンチのお店がある。私が初めてそのお店を訪ねたのは高校生の時。里が京都の母と、清水さんの裾のお墓にお参りした帰りのことだった。ちょっと余談。実はその時、お隣のテーブルで今は亡き水戸黄門（西村晃）様が、スーツ姿でナイフとフォークをとても美しく操ってお食事されていた。そのアンバランスな感じと、ダンディなお姿がとってもステキだったのを今も忘れない。

絶品のお茶漬け

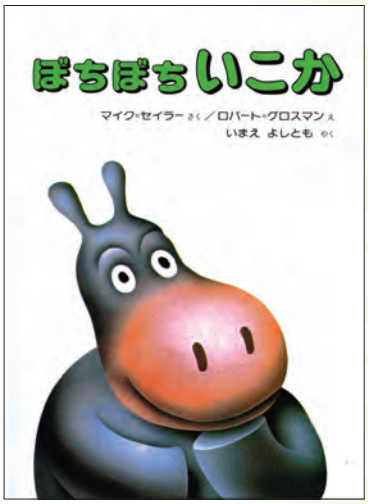
さて、お料理はどれもこれもため息がでるほど絶品！はしゃぎすぎた胃袋がそろそろslow numberを欲する頃、なんと！「お茶漬け」が、まるで祇園のきれいどころのような色とりどりのお漬物と一緒にすまし顔でやって来た。そしてそれ等は、今しがた置いたばかりのナイフとフォークの余韻を決してかき消すことなく、それどころか「蔭で男はんを支える京女」のpolicyが如く、しっかり前のフレンチを引き立てる。初老の一流シェフがサラリとお茶漬けにウィンクを飛ばすおしゃれ感に、多感な女子高生の私は胃も心もメロメロ。

絶品の絵本

時は流れ、我が子が青春の道を探している頃であった絵本は、これまた絶品中の絶品！今江祥智先生翻訳『ぼちぼちいこか』。文、絵、共にアメリカ人の作品をサラリと大阪弁に翻訳されたsenseとその技の素晴らしさに感服、脱帽。何をやってもうまくいかないおとぼけカバ君と、今江先生のウィンクで魔法にかかった大阪弁が、マッタリ溶け合って、身体の隅々まで染みわたる。弱った心には尚のこと。気がつけば読者は笑顔に。顔を上げる頃には道が。

紙の香りと、掌の心地良いあの重みがなければ「読書」ではない。と、未だ譲れない頑固ばあさんになりつつ私も、絵本や童話を書き始めてはや10年。先人たちの粋なウィンクを仰ぎ見て本に埋もれる修行を楽しみながら、「ぼちぼちいこか」。

末政さんは児童文学の執筆もされている。



Shoin Library

学生からの声

図書館と私

山本 真理子（やまもと まりこ）
学芸学部英米文学科 4 回生

私にとって図書館は、ひとつには先ず、いつでも書物、新聞、雑誌、インターネットからたくさんの知識や情報を得ることのできる学びの場であります。

そしてまた、のんびりと読書を楽しむことのできる憩いの場でもあります。

アイデアの生まれる場所

レポートなどの課題がある時には、図書館で様々な方法で調べ物ができ、とても集中して効率的に勉強することができました。四回生では、教育実習のための教材や資料が全く思い浮かばずに困っている時、図書館へ行き教育に関する書物を見ると、次から次へとアイデアが浮かび実践へと結びつく準備ができ、非常に助かりました。また、卒業論文を書くために必要なアメリカ文学やイギリス文学の書物も、図書館にはどれを読もうか迷ってしまうくらい多くの作家の作品がありました。その中から自分の研究分野を選び、深く研究できました。学びの場である図書館は、自分にとって一番良い方法で答えを見つけ出すことに、手を差し伸べてくれる場所でした。

憩いの空間、出会いの場

憩いの場である図書館は、時間がとまったように静かな空間で、自分の読みたい本を落ち着いて味わい、好きな世界に浸ることのできる場所でした。新しい書物との出会いが待っている場所でもありました。図書館で書物を手に取ると、製本が綺麗で印刷の匂いがし、図書館の歴史を感じながら、書物とコミュニケーションをとることができます。私の前には、どんな先輩がどんな想いでこの本を手に取ったのだろうと考え、本を読むうちに作者の心の中に触れ、ワクワクします。書物を通し、調べ物以外のこともたくさん学びとることのできる掛替えのない場所です。

最後に、図書館員の方々がとても親切に応対してくれたことも忘れられません。書物の場所が分からず戸惑っていると案内してくださり、新しく入った本やお勧めの本を紹介していただきました。この四年間どんなときも、本当に図書館にお世話になりました。社会人になっても、読書の時間と図書館を大切にしていきたいと思っています。

The big issue

石野 美由紀（いしの みゆき）
学芸学部ライフプランニング学科 3 回生

「The big issue」という雑誌をご存知でしょうか？

この雑誌は月に 2 回発行されているエンターテイメントを中心とした情報雑誌です。ですが、この雑誌にはほかの雑誌とは少し違う点があります。それは、販売員が「ベンダー」と呼ばれておりそのベンダーは皆ホームレスであるということです。

全世界で発行

「The big issue」はイギリスの化粧品製造会社が、アメリカでホームレスのみが販売出来る新聞（street newspaper）を見かけたことをきっかけに調査し、ロンドンでもビジネスとして成功するという調査結果により始められ、1991年にホームレスの社会福祉情報だけでなく、先ほど書いたようにエンターテイメント情報なども重視してロンドンで第 1 号が発行されました。全世界で各言語に翻訳・独自編集し、発行されています。

日本では2003年 9 月から大阪市で発行されるようになり、発行都市は年々拡大しています。身近な地域では難波や梅田、三宮で見かけることがあります。

現実を知る

この雑誌はインターネットで購入することも可能ですが基本的に路上で販売されています。私はこの雑誌を母を通じて知り、購入する機会があれば購入するようにしています。それは販売価格の300円のうち、160円は販売員の収入になるからです。ホームレスの生活から抜け出す努力をされている販売員の力になるし、現実を知ることが出来ると私は考えます。

この雑誌を売っているのを見かけてもわざわざ声をかけて購入する人は少ないかもしれません。雑誌の内容があまり好きではない人もいるかもしれません。しかし、見かけたら一度は買ってみてほしいと思います。この原稿の話をいただいた時に正直何について書こうか本当に迷いました。しかし、たくさんの人にこんな雑誌があることを知ってもらえるチャンスだと思い書かせていただきました。

仲谷 早織（なかたに さおり）
（臨床心理学科 1 回生）

学生からの声

本との出会い

川村 美智留（かわむら みちる）
人間科学部心理学科３回生

漫画にない魅力

私は幼い頃から本と触れ合う機会が多い環境で育ちました。それは幼稚園で貰ってくる絵本や両親が買ってきてくれる本など様々でした。小学生になり、私たちクラスメイトの間では図書室に置いてある伝記漫画がブームとなり、借りるのも１ケ月程待つこともあるぐらい人気になっていました。待つことに我慢できなかった私は、初めて漫画ではない本、つまり小説の伝記本へと手を伸ばしました。漫画と違い、文字ばかりの小説では、読み進めるのにとても根気のいることでした。しかし読むにつれ物語の続きが気になり、漫画になかった魅力に気付きました。そして初めて小説を読み終えることの出来た達成感と新たな本への興味に心が惹かれて行きました。

それからと言うもの、読書する楽しさを覚えた私は、伝記小説を始め、昆虫記・動物記・ファンタジーとありとあらゆるジャンルの本を次々と読んでいき、本への魅力に引きずり込まれて行きました。すると不思議なことに、それまで苦手だった漢字が、本を読むことにより読み書きすることが出来るようになりました。そして次第に『国語』科目も好きになりました。

国語科へ

高校受験では、そんな経験を生かし、国語科という特殊学科のある高校に進学することができました。そこでは私と同じ本が好きなクラスメイトや素晴らしい先生にも出会うことができ、授業も国語を中心とした科目が多く、文学踏査など一生の思い出に残る経験もさせて頂きました。

現在大学３回生になり、専門図書で充実している大学図書館を週に１回は利用しています。またゼミでの発表で本を読む機会も多くなってきました。

現代では本を読む人が少なく、苦手意識を持つ人も多いと思います。しかし、本には物事に関しての考え方や、沢山の知識をもたらしてくれます。そして何より、言葉では言い表せない程の感動と充実感があるという事を大勢の人に知って欲しいと私は思います。

読書をとおして

馬場 梓（ばば あずさ）
短期大学部キャリアデザイン学科１回生

私は、本の世界に魅了されることがよくあります。本の世界に入りこんでしまい時間を忘れて集中してしまうこともあります。そうすると、悲しい本を読んだ時は涙を流してしまうことがありますし、楽しい本を読んだ時は笑顔になってしまいます。本を読んでいるといろんな感情を体験します。

『余命１ヶ月の花嫁』

そんな私が最近読んで、一番印象に残っている本は『余命１ヶ月の花嫁』です。本に登場する長島千恵さんは、20代という若さでガンだと診断されました。そんな千恵さんの家族や恋人との闘病生活がこの本には綴られています。

初めて千恵さんを知ったのは、テレビ番組でした。私と歳の変わらない女性がガンと立ち向かっている姿に感銘を受け、本も読んでみることにしたのです。本には私には理解しきれない程の苦しさが書かれていて、ガンの恐ろしさを改めて考えさせられました。

人の温かさ

そして、私が何よりこの本を読んで感じたことは、周りの人の温かさでした。家族や恋人の千恵さんに対する温かい想いに何度もふれ、周りの人の温かさや大切さなどについて考えさせられました。もちろん私にも、周りの人に感謝する気持ちはこれまでもありました。でも、それを言葉にすることはできずにいました。この本を読んで、人の命は本当にあっけないものだと感じ、命がなかったら、伝えたい感謝の気持ちも伝えることができなくなると思いました。だから、今言葉にできる間に気持ちを言葉にして伝えないといけないなと考えるようになりました。

私は、本を通して命の大切さや、周りの人の温かさや大切さを改めて感じることができました。読書は普段あまり気にしていなかった大切なことに気が付かせてくれます。だから私は、これからもたくさんの本に出会っていきたいです。

学生選書ツアー報告

大学院人間科学研究科臨床心理学専攻１回生　村上（むらかみ・のりこ）　法子

最初は自分が好きな本を自由に選ぶことが出来るということを魅力に感じて、友人達と誘い合って軽い気持ちで選書ツアーに参加しました。選書ツアーの前には予め何冊か購入希望の本を調べてピックアップしていましたが、当日１人当たり10冊以上選ぶことが出来ると聞き、驚いたと共に、ここで購入許可された本は図書館に置かれ、皆の共有財産となることを改めて実感しました。たくさんの本を手にとって選ぶことができることは楽しみであると同時に、これは重大な役割でもあるのかと、１冊の本の重みをずっしりと手に感じました。

そんな緊張感を感じながらも、実際に本を選ぶ段階になると夢中になって色んな本を手にとって見ていました。ああでもない、こうでもないと言いながら一人で、また友人と共に本を選ぶ時間は、普段には味わえない貴重な時間でした。自分の興味のある分野の本を選ぶことはもちろんのこと、一緒に選書ツアーに参加している人の趣味嗜好が選ぶ本に顕著に現れており、新たな一面が垣間見える面白い機会となりました。

本を選ぶ時間はたっぷりと取っていただいていましたが、ノルマ（？）の本を選ぶのに気がつけば時間ギリギリとなっていました。今思い返してみても、こんなにもたくさんの本を一度に書店で購入する機会はありません。いつでも行ける書店でありながら、いつもは出来ない新しい体験となりました。ありがとうございました。

竹中（たけなか）舞香（まいか）
（国文学科３回生）

Shoin Library Update

自著を語る

『幸せを築く対人援助』（フィリア 2008年）

児童学部 児童学科教授
岩崎（いわさき） 正子（まさこ）

はじめにお断りをしておきたいのですが、本書は単著ではなく、人間科学部心理学科でお互いの研究室が隣り合う４人が協力し合って書いたものです。共同執筆者は大江米次郎教授、夏目誠教授、上野矗元教授です。

本書は対人援助の今日的課題について、４人の異なった心理、福祉臨床、精神医学の専門領域から共有土俵で追求、結晶化を考え、作成したものです。

臨床の現場から―座談会

本書のユニークな構成は座談会から始まります。以下、書かれている内容について説明します。まず教育の臨床領域から（大江、以下敬称略）の課題としては、学校生活でのコミュニケーションの希薄化、例えば、子供と教師の間、子供同士、教師と保護者の間など。次には家庭生活の歪み、さらには地域における子育ての連帯感の希薄化。心理学（上野）の課題としてはそれぞれの専門分野に細分化されていて、領域を超えた生活周辺の状況に科学的関心を示しえていないこと。即ち、心理学の学問的な内容と生活現場に乖離が生じていること。福祉臨床の領域から(岩崎)は、生活に根ざした援助の実質的課題と地域－“地域力”、援助と人権について。精神医学の領域から（夏目）は、自殺者、うつ病患者、メンタル不調者の増加が重要な課題として挙げられています。心理、福祉、臨床領域の共有土俵とは、それぞれの専門領域が共通して人間の所作を問題にしていることであり、生活のトータリティ、人間の全体を見る視点をもつことによって、援助のあり方に変化をもたらす可能性を見出すことです。次に多様な地域社会や複雑化している家族の状況に対する援助として、キーパーソンの活用とそのあり方について論議しました。座談会のまとめとして、共有土俵からの提言“一言足すコミュニケーション”“生かされている、即ち、生活の中で実感を持てるような支援のあり方”を挙げました。

“対人援助”の諸相

以下、幼児期から高齢期までのライフステージの諸課題を、“対人援助”をキーワードに、３篇に分けてさらに詳細に論じました。第１篇では「心理・福祉・臨床からの考え方」として、 対人援助とは（心理臨床の立場から―上野）、生活に根ざした援助とは（福祉臨床―岩崎）、教育の心と家族と学校（教育臨床―大江）、働く人々のメンタルヘルスの現状（精神医学―夏目）等について基本的な考え方やそれぞれの領域の現状について論じました。第２編では「日常生活と対人援助」として様々な対象者の日常生活に迫りました。子どもの心理からの福祉（大江）では虐待や非行にも言及しています。障害のある人の心理からの福祉（岩崎）では知的障害のある人々のＱＯＬに関する縦断的研究を紹介しました。職場臨床からの問題提起（夏目）ではうつ病、リストラ症候群、自殺の実態について言及しています。高齢者への対人援助（上野）では高齢者の援助となる生き様の事例から論じています。第３篇では「心豊かな対人援助システム」として、豊かで健やかな学校生活への援助―学校の再構築（大江）、職場の対人関係・職場臨床からの心の健康づくりシステム（夏目）、地域・社会システムの再編成の視点―福祉領域から（岩崎）について論じました。

最後に、“対人援助とは”と聞かれれば、私たち４人の見解は“人生の良き脇役になる”ということです。

著 者
岩崎正子
上野 矗
大江米次郎
夏目 誠

Shoin Library Square

オトナになれない大人の口癖
― 村上龍『69（sixty-nine）』―

学芸学部国文学科教授　有田（ありた・せつこ）節子

言い訳のようにいう口癖がある。「意識としては、未だに大学院生なんだよね。」

そこには、研究者としては半人前以下で、教えるよりも学ぶことの方が圧倒的に多くて、いつまでも自分の研究に自信が持てない、そんな不安な気持ちと、オレ様は偉いんだ、もう誰からもその地位を脅かされることはないんだ、という大御所たちに対する反発心とが共存する。

偶然の出会い

そんな中途半端な四十路女の心をくすぐったのが、村上龍の『69(sixty-nine)』。1987年に発行された本だが、私が読んだのは昨年の９月初旬。アメリカ行きの飛行機を待つ空港の本屋の棚で偶然見つけたのだった。その頃は、ちょうど、やっかい（だけど重要）な委員会の委員になって、あちこち奔走しつつ出張の準備をばたばたとやっていたために、飛行機の中で読む本を選定する暇がなかった。なんでもよかったけれど、なんとなく選んだのがこの本。

村上氏自身があとがきでも書いているように、この小説は1969年に高校生だった村上氏のまわりで起こったことの一部が描かれたもので、一本通った筋があるわけではない。多くのエピソードを通して、当時の学生運動の象徴的な年でもある1969年という時代と、その時代に翻弄されながらも自分らしく生きようとする高校生の姿がある。高校生あるいは大学生の子供がいてもおかしくない年齢になってなお、ここに描かれている多感な高校生の言動にいちいち同感する。バリケード封鎖、それによる109日間の謹慎、全校集会、そして極めつけの500人近い高校生を動員した「フェスティバル」。当時は高校生の政治意識がかくも高かったのか、と思いきや、実はその原動力は、ただ、「女の子にもてたい」ということだったりして、大いに同感。

楽しい小説

村上氏のあとがきに次のように書かれている。

これは楽しい小説である。

こんなに楽しい小説を書くことはこの先もうないだろうと思いながら書いた。

この小説に登場するのはほとんど実在の人物ばかりだが、当時楽しんで生きていた人のことは良く、楽しんで生きていなかった人（略）のことは徹底的に悪く書いた。

（中略）

楽しく生きるためにはエネルギーがいる。

戦いである。

わたしはその戦いを今も続けている。

退屈な連中に自分の笑い声を聞かせてやるための戦いは死ぬまで終わることがないだろう。

オトナになれない私が、権威を見せつけようとするオトナたちに反感を持つのは、まさに、彼らがちっとも楽しそうじゃないからに他ならない。自分の立場を守るためにのみ生きるのは見苦しい、格好よくない。だから、次の大台を迎えることになっても、相変わらず、その口癖は続くだろう。

ところで、やめたい口癖もある。服を試着しながら口走る、

「え、これオトナっぽすぎるかな。どう思う？」

ええかげんにせい、である。

水谷（みずたに）仁美（ひとみ）（インテリアデザイン学科４回生）

図書館職員だった頃

学芸学部ライフプラニング学科教授　森田（もりた）園子（そのこ）

館報に私的なことを書くのはいかがなものかという迷いはあるが、母校図書館が私の最初の職場であり、図書館について語る時、そのことに触れないわけには行かないことをご理解いただければ幸いである。

司書への道

40年近く前私がまだ大学生だったころ、卒業後の進路を考える時期になって、最初に思いついたのは研究者の秘書になることだった。秘書への道はゼミの指導教官であった小西友七先生（皆さんご存知の大修館英和辞典・和英辞典Geniusの編者。ゼミは英米文学科の柏野先生と同期）に軽く否定された。日本の研究機関で秘書をきちんと処遇しているところはほとんどなかったからであろう。その私が後々、秘書を始めとする女性職の研究に携わることになろうとは夢にも思わなかった。

次に思いついたのが中高の教員への道。私にとっては「ずっと続けられる仕事」というのが職業選択の第１の条件であったし、当時は利益をあげなければならない仕事が自分に向いているとは思えなかったからである。教員採用試験を受け、面接も終了したころに就職課から母校図書館が司書を募集していると声をかけてもらった。母校では司書資格が取れなかったため、確か３回生の夏休みをはさんだ３ヶ月間、昭和町にあった桃山学院まで司書講習に通ったことを就職課との面談で報告していたからである。「これだ！」とばかりに受験し、卒業と同時に司書としての毎日が始まった。

当時はまだコンピュータは普及しておらず、蔵書目録はカードが主流だった。しかもコピー機は出始めたばかりの誠に高価なものであったため、カードの作成は蠟原紙に鉄筆、はがきサイズの謄写版という時代だった。若い世代にご理解いただくのは難しい道具たちである。退職後しばらくして元の職場を訪れた頃には既にパソコンが使われるようになっており、かつて習得した目録カード作成の技法は無用の長物となって、「もう帰ってきても役に立たへんなあ」と先輩にからかわれるような状況になっていた。

恐怖のレファレンス業務

司書となってからは、図書館が知識の全体系を網羅するものであるからには、その全体系を理解しなければならないと空恐ろしくなったものである。もっと恐ろしかったのはレファレンス業務だった。母校には夜間開講の学部があり、図書館の勤務もシフト制で、夜間は１階と２階にひとりずつしか勤務していない。最初のうちは、学生からの突然の質問（しかもどの分野から攻めてこられるかは予測できない）に答えられるだろうかとドキドキしていた。その場で答えてしまおうとするより、翌日まで待ってもらってでも先輩たちの知恵を借りる方が理にかなっているのに気付くまでには少し時間がかかった。

司書の小さな喜び

日常業務にも慣れてきたころ、何かツールを作りたいと思い、英文学の作家研究・作品研究の目録作成を手がけた。書名や件名としてカード目録にあげられているものは発見しやすいが、そこにはあげられていないものが埋もれているのを何とかできないかと考えたのである。今思えば無謀な計画ではあったが、その作業がある程度進んだある日、夜間の学部に再入学し、教員免許の取得を目指していた先輩から「サッコ・ヴァンゼッティ事件について書いたものないかな」と尋ねられた。たちどころに資料を提供できたのは小さな喜びであった。

その後縁あって大学の教員となった今も、図書館は私にとって特別な存在である。

髙森彩香（被服学科３回生）

Shoin Library Update

情報化時代の読書とは

児童学部児童学科准教授　佐野（さの・みな）美奈

世の中、ＩＴ化が進み、かつて百科事典で調べていたものもインターネット上で広範囲に情報を得ることができるようになりました。図書館の書庫の奥まで目当ての資料を探して右往左往しなくても、きちんと整理された情報が大量に手に入るようになったことは、とても便利だと実感します。

しかしながら、大量の情報を瞬時に受け止めて自身に必要な事柄を取捨選択できているのか、またひとつひとつの問題について熟考できているのかということになると、全く出来ていないと思います。

深く読み込む

また、インターネット上の多くの情報に振り回されて、とんでもない買い物をすることになり、結果的には騙されていた、という話もよく聞きます。情報の受け手は、無限に情報を処理できるわけではありません。一度に多くの情報が入ってくると、なかなか冷静になれず、無責任な情報なのか誠意のある情報なのかを確かめることを怠りがちになるでしょう。こうして得られた様々な情報から自身の知識を構成しているとしたら、随分いい加減なことしか受容できていないことがわかってくると思います。

私達には、情報化という便利さに流されるのとは別に、自身で考えて判断し行動する、じっくりと考えて問題解決することが必要な場合が多くあります。それは、じっくりと一冊の本を読んで深く考えようとする姿勢、落ち着いて考えて文章化してみる行動のプロセスに似ているところがあると思います。何か一つのテーマについて調べてみようとするとき、そのテーマに関する多くの著書、報告書、論文等を収集して内容を瞬時に整理して問題提起して検討に入るといった迅速さも大切でしょうが、かなり深く読み込むことが必要とされます。他者の考えを理解するということは、インターネット上の多くの情報を瞬時に要約するよりもずっと時間がかかります。そのために、じっくり読んで落ち着いて考えてみる、考えて自身の文章にしてみる、という作業を省略したり、他者の言葉や文章をそのまま引用して済ませようとする人達も出てくるのです。

経験を方向づける

それだけに、情報化時代の読書は、インターネット上の操作とはかなり異なった落ち着きと熟考を養うものだと私は考えています。１冊の本が古今を問わず名作だとか、人によっては座右の書だとか言われているのは、読者がその本を落ち着いて深く読み、行間を読み取って自身の内面に取り込んでいるからでしょう。その本の著者は読者に何を最も伝えたかったのか、なぜそのような理論あるいは体験（虚構の文脈）が示されているのか、それらを読者はどのように理解すべきなのか、理解したことを再構成して今の自身にどう生かすことができるのか等、様々な視点から考えることができます。そうした自身の試行錯誤の後にまとまった考えを得ることは、現実社会で問題に直面したときに様々な視点から熟考し判断して行動を選択する場合の疑似体験だと言えるでしょう。

そういった意味で、乳幼児期から絵本や物語の読み聞かせなどを通して読書の初期体験をし、就学期から大人までずっと身近に文字や文献が豊富な環境にあることは、私達の生き方や選択すべき経験を方向づけてくれるヒントに恵まれているのだと捉えることができるのではないでしょうか。このような環境を生かして、誠意のあるヒントを得るのが、情報化時代の読書のあり方だと思います。

村上友美（児童学科４回生）

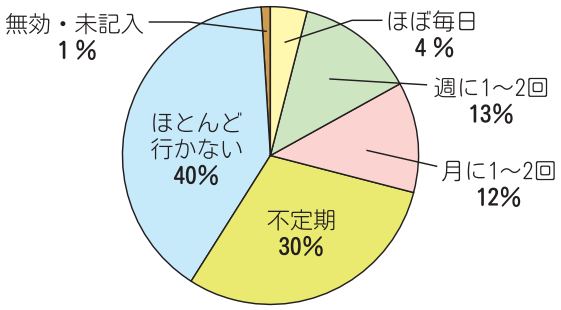
「図書館利用実態調査」アンケートから

図書館では、小阪・関屋両キャンパスの全学生を対象とする「利用実態調査」を実施しました。調査の目的は図書館利用の現状を調べることにより、今後の図書館運営や広報の在り方、蔵書の充実、さらには企画・展示をも含んだ図書館サービス全般の改善に反映させることです。調査結果を一部掲載します。

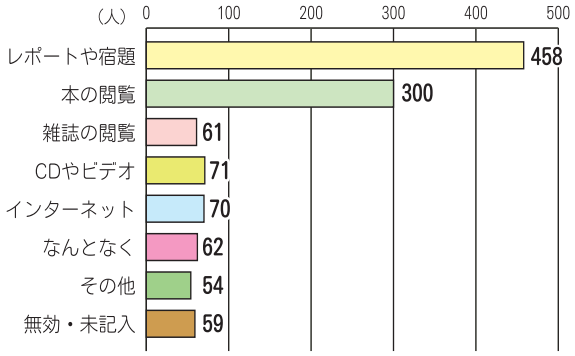
調査期間：2009年９月29日～10月16日　調査部数：2635部　回収部数：1211部　無効１部
有効回答数：小阪829部・関屋382部　合計1211部

図書館の利用状況について

☆どのくらいの頻度で利用していますか

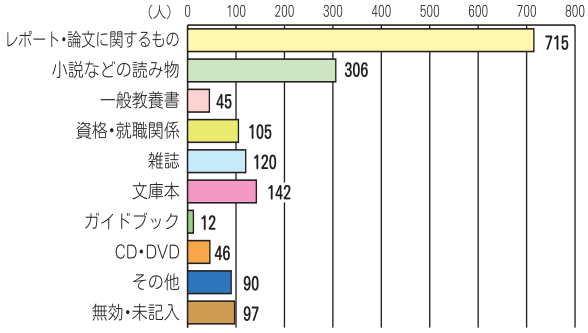


☆利用する主な目的は何ですか（２つまで回答可）

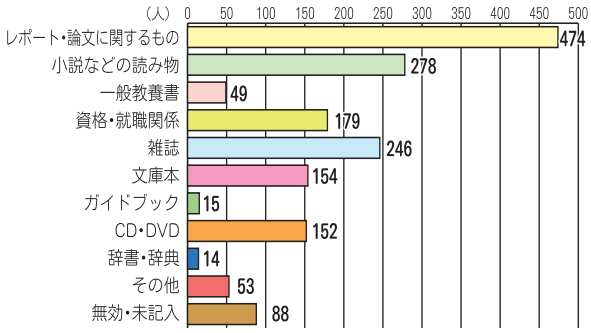


図書館の資料について

☆図書館で本を借りる時、どのようなジャンルのものが多いですか

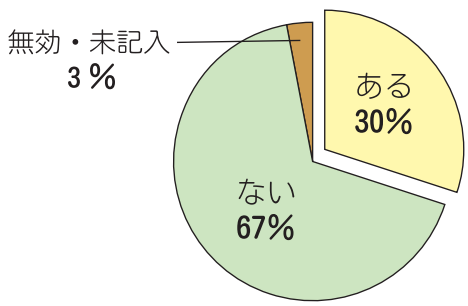


☆今後、もっと充実させてほしい資料はどのようなものですか

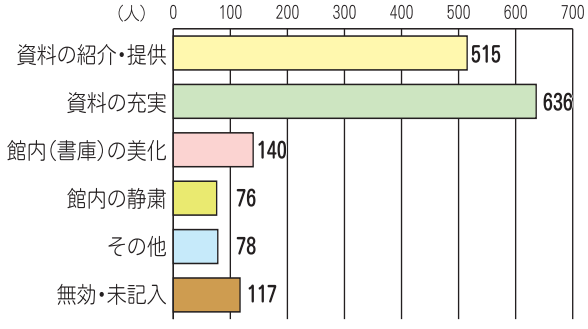


図書館カウンターサービスについて

☆資料の探し方がわからないときに、図書館のカウンターで相談したことがありますか



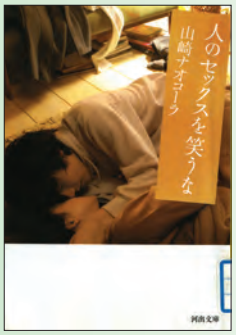
☆今後図書館員にどのようなサポートを求めますか（２つまで回答可）



報告の詳細については、図書館ホームページで閲覧できる他、
図書館に冊子を置いていますのでそちらをご覧下さい。

ベストリーダー 2009

順位	書　名	著者名
1	人のセックスを笑うな（河出文庫）	山崎ナオコーラ　著
2	クエスチョン・バンク管理栄養士国家試験問題解説　2009	医療情報科学研究所　編
2	日本十進分類法　新訂9版　本表編	もり　きよし　原編
2	日本十進分類法　新訂９版一般補助表・相関索引編	もり　きよし　原編
5	重力ピエロ（新潮文庫）	伊坂幸太郎　著
6	魔王（講談社文庫）	伊坂幸太郎　著
7	ぐりとぐら（こどものとも傑作集）	なかがわりえこ　著　おおむらゆりこ　絵
7	少子社会日本（岩波新書）	山田昌弘　著
7	エントリーシート対策　2009年度版	福沢恵子　著
7	おくりびと（小学館文庫）	百瀬しのぶ　著



19歳のオレと39歳のユリ。せつなさ100%の恋愛小説。選考委員に絶賛された第41回文藝賞受賞作。

人気の問題集。毎年新しいものを購入し古いものもおいていますが、ほとんど貸出中になっています。

連続放火事件のあとに残されたグラフィティアートの落書きと遺伝子のルール。謎解きをはじめた兄がたどり着く真実は……

野鼠のぐりとぐらはおおきな卵でカステラを焼いて……昨年もベストリーダーに選ばれた圧倒的人気の絵本。

少子化のスピードが加速している理由を探り、とるべき少子化対策は何かを考える。

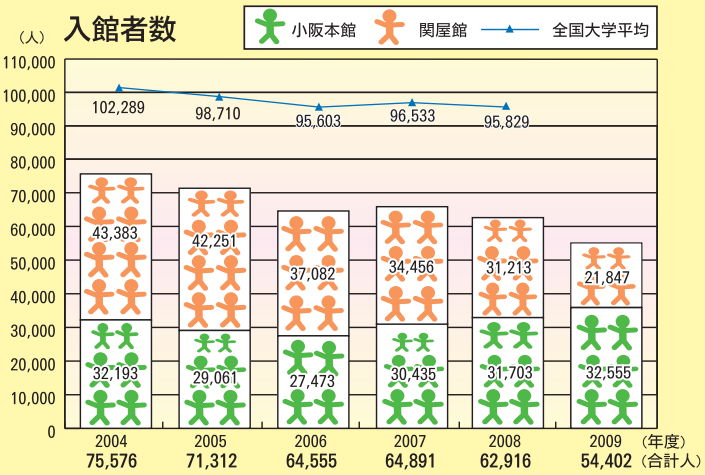
自己ＰＲ、志望動機、将来展望をいかにエントリーシートに盛り込むか……内定学生の通過実例付。

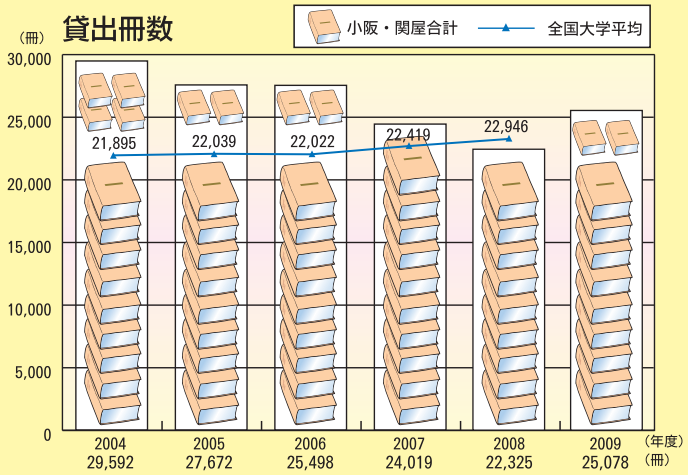
2009年4月から2010年1月までの貸出人数に基づいたランキングです。

LIBRARY DATA 2009年度 図書館統計

年　度　推　移

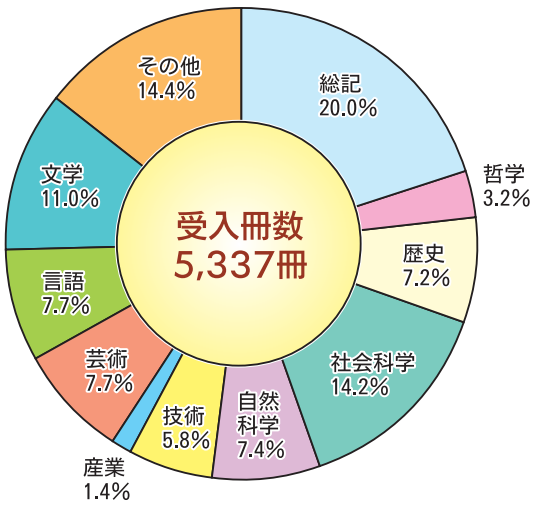
（入館者数・貸出冊数は2009年４月から2010年２月24日までの合計）

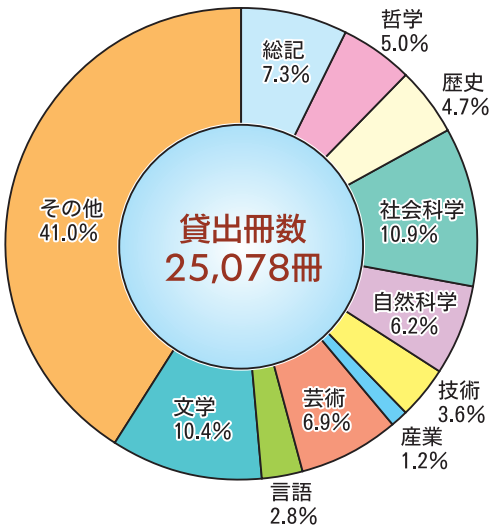




入館者は関屋館で昨年度より大幅に減少しています。改組による、学生数の減少が影響しているのかもしれません。逆に小阪本館はインフルエンザ休暇等があったにもかかわらず、入館者が増えています。貸出冊数のうち、学生の割合は65.7%（昨年度72.4%）ですが、学生一人当たりでは6.4冊（昨年度5.9冊）と昨年度より増えています。

分野別





2009年度の図書受入冊数と貸出冊数の分野別割合です。“その他”は旅行ガイドブックや文庫本、資格・就職関係、視聴覚資料などで、“その他”が貸出冊数の41%を占めています。他の分野の貸出は減少していますが、入館者が減っているのに、貸出冊数が増加しているのは、回転よく資料が利用されていることかもしれません。

はばたけ、知性。

本学所蔵
“Lothar Meggendorfer's International circus : an adaptation of the antique pop-up book”
(Kestrel Books 1979)

編集後記

利用低迷に悩む大学図書館が多いらしい。ケータイの一部利用を許したり、チェーンのコーヒー店を誘致してみたり、学生呼び込みに必死、という御時世。時恰も国民読書年の本年、読書の殿堂たる図書館に足を運んでもらうささやかなきっかけになれば、とささやかなニュースレターを編んで4号までこぎつけた。「出世したければ本を読め」とのたまった閨秀作家ほどヤボではないが、学生の本分読書にあり、くらいは辛抱強く訴えていきたい。 (歌野)

大阪樟蔭女子大学図書館報 こかげ 第4号

発 行 日　2010年3月31日
編　　集　大阪樟蔭女子大学図書館報編集委員会
発　　行　大阪樟蔭女子大学図書館
小阪本館　大阪府東大阪市菱屋西4-2-26　TEL.06(6723)8182　FAX.06(6723)8387
関 屋 館　奈良県香芝市関屋958　TEL.0745(71)3158　FAX.0745(71)3148
ホームページ　http://library.osaka-shoin.ac.jp/